

「伝統・文化」体感型ワークショップ 【研修編③】

「能の謡」の魅力を味わう（受講者 17 名）

講 師：梅若 基徳

実施日：平成 22 年 7 月 29 日(木)

=====

■目的：

- ・伝統や文化を尊重する意義を知る。

- ・能楽の歴史や内容等、指導上必要な事項を学ぶ。
- ・「能の謡」の体験を通じて、「能の謡」を実演できるようになる。
- ・現場の授業をシミュレートし、授業における「能の謡」の指導法を学ぶ。

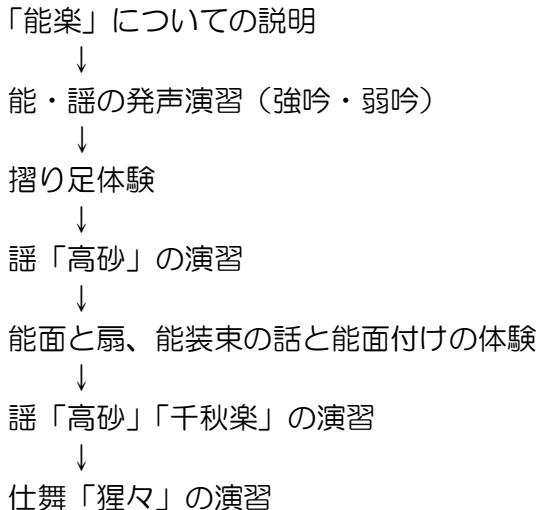
■期待される効果：

- ・学校における伝統音楽の指導の工夫改善を図る契機となる。
- ・「能の謡」の演奏技能や知識をより深め、技術力、指導力の向上が期待できる。
- ・「能の謡」の発声の特徴や表現の豊かさを体験し、教員が和楽器や伝統・文化のよさを感じ取るとともに学校や児童・生徒の実態に応じた授業展開を計画・実施できる力を身に付ける。

■準備教材・設備等：

シート（土足厳禁の会場）、白足袋又は白ソックス

■研修の流れ（@6 時間×1 日）



■Advice points

- ・ワークショップ体験後に「能」観劇をすると、能楽への理解がより広がる。

■講師の感想（要約）

能楽は日本で生まれ、現在まで継承されてきた伝統芸能でありながら、教育現場では、能楽を子どもたちに教えることができる先生が少ないと実感した。謡の演習では大きな声を出して演習でき、難しい節を習得してもらえることができた。今後、授業における能の指導テキストが必要であると感じた。

■受講者の感想（抜粋・要約）

- ・伝統・文化に親しむ機会はなかなかない。五感で感じる実体験をして貴重な体験となった。
- ・専門的な技能なので専門家との連携を図ることが有効だと感じた。
- ・子どもたちにとって能は難しいものと感じていたが、申楽や初心の話は子どもが興味を持ちやすい話題である。
- ・謡は楽器より、初心者でも自分なりの表現がしやすい。声を出すことの恥ずかしさを乗り越えることが必要である。謡の抑揚は難しいが、特徴を楽しむことを伝えたい。
- ・日本古来の文化は、日本人の感性に合ったものが発展してきたものなので、子どもたちも抵抗なく受け入れられるように指導したい。
- ・感動した体験は、より熱意をもって生徒に伝えられるエネルギー源になる。
- ・伝統・文化の基礎知識・技術・技能が乏しいので、もっと勉強して指導できるようになりたい。
- ・海外では、自国の伝統・文化を学習してから、ある年齢で興味のあるものを選択するシステムができているが、日本はそれが欠けていることを痛感した。

